博士論文「ジャン＝ポール・サルトルの社会思想」

三宅　芳夫

論文の内容の要旨

本稿は次のような論点に注意しながら、ジャン＝ポール・サルトルの思想と軌跡を統一的な視点から描きだすことを目的とする。

第一に従来「近代的主体主義」や「マルクス主義」という解読格子でのみ捉えられがちであったサルトルの「実存主義」を、１９世紀以来のフランス近代の「アナーキズム」という文脈に置き直してみること。

第二にサルトルの「実存主義」が近代独我論の典型であるという通説を批判すること。「実存主義」とは存在論から倫理学、秩序形成論、政治理論にいたる抽象化の異なるあらゆる水準において、独我論を「他者との関係」の視点から批判しつつも、共同体論を回避し、存在論的＝超越論的複数性を擁護しようとする試みである。すなわち「関係性」の可能性の条件としての「単独性」、「単独性」の可能性の条件としての「関係性」という循環を主題化すること。

第三に「国民国家」と資本主義の論理を相対化し、植民地主義・人種主義を批判する２０世紀の「アナーキズム」としてのサルトルの「実存主義」が具体的にどのような「政治」と渡り合ったのかということを当時の社会構造や知識人の空間の配置などを参照しながら追跡すること。

具体的な論文の構成としては、まず序論において「ジャコバン」モデルと「社会国家」

の結合としてフランス国民国家の統合原理を押さえた上で、それとの対抗関係としての「アナーキズム」の位置を測定することを試みる。その考察にあたっては「アナーキズム」の社会的基盤と思想の内在的原理の双方を分析の対象とする。

本論では２０世紀前半から中頃にかけての孤立した「アナーキズム」という視角からサルトルの思想とその軌跡を分析する。その際、第一部においてサルトルの思想の内在的論理を分析し、第二部においてサルトルが如何に自らの原理的な立場と政治的有効性の要請との折り合いをつけようとしたかという視点の下に、当時の政治社会状況、社会運動の構造、知識人の空間の配置などと関係づけながらその軌跡を追跡する。

第一部では当時の「実存主義」的環境の見取図とそのなかでのサルトルの位置を第一章で簡単に素描した上で、第二章でサルトルの思想の内在的な分析を行う。節の構成としては第一、第二節において、予備的作業としてそれぞれ、サルトル及びボーヴォワール自身の証言及び『嘔吐』、『壁』等の小説や戯曲、『シチュアシオン』の記述を検討し、、続く第三－五節において『存在と無』や『道徳論のための草稿』、『弁証法的理性批判』等の理論的著作を分析する。

第三節では主に『存在と無』に依拠しながら、サルトルが独我論を「他者との関係」の視点から批判しながら同時に共同体論を回避し、存在論的複数性を確保するという試みに如何に取り組んだかということを明らかにする。

続く第四節では、第三節で明らかにしたような存在論に基づいてどのような倫理をサルトルが構想したかを、従来あまり扱われてこなかった『道徳論のための草稿』を中心に考察する。そこでは実存主義の倫理学は次のように要約される。第一に存在論的複数性の根拠である「関係性」の可能性の条件としての「単独性」、「単独性」の可能性の条件としての「関係性」という「超越論」的循環を引受け、この循環を隠蔽するような「理念」の基礎づけを批判すること。第二に超越的理念に基礎づけられた倫理ではなく、存在論的＝超越論的複数性条件である自－他の「自由」相互の調整に基づいた具体的暫定的な倫理を構想すること。第三に倫理を行為者の自由によって無限に更新され続ける創造行為として捉えること。またこのような倫理へのサルトルの問いがフーコーやデリダなどの「ポスト・モダン」の思想と無縁ではないことを示唆する。この点は補論２において詳説される。

秩序形成論を扱う第五節では、サルトルが前期の個人主義的実存主義から後期においてはマルクス主義に移行したという通説を批判し、実存主義の秩序形成論として『弁証法的理性批判』を再検討する。ここでは「行為」や「時間」といった分析のための基本的範疇

の内容や「他者との関係」の視角からの独我論批判という論点、存在論的＝超越論的複数性という条件の重視などの面で、『存在と無』の立場との連続性が確認される。その上で、サルトルが『批判』において、こうした立場から「歴史」や「社会」を構成することの可能性の条件をどのように考察したかが分析される。

第二部では第一章で両大戦間の急激な重化学工業化と工場の大規模化を伴う産業構造の転換が、労働運動を中心とした広汎な社会運動のレベルで僅かに残存していた「アナーキズム」の社会的基盤を消滅させたことを指摘し、第二章でそのような状況下での「アナーキズム」的知識人の行動様式を把握するために１９２０年代のシュルレアリスムと人民戦線期のジイド、マルローの「社会参加」を検討する。

以上のことを踏まえた上で第三章以下で五つの時期に分けてサルトルの政治的軌跡を考察する。

第三章では１９３９年以前の時期を扱うが、メルロー＝ポンティが言うようにこの時期のサルトルが「政治」と極めて厳しい緊張関係を保っていることを指摘し、「政治に無関心な観念的プチ・ブル」と規定する通説を批判する。そしてその政治思想を、政治的「理念」に諸実存の存在論的複数性を統合する「政治主義」に対する批判としての「非政治主義」として捉え直す。しかもその際、サルトルが「歴史の不条理」や「社会変革の不可能性」に決して居直らず、あくまで「倫理の不条理性」と「倫理の必要性」の間の緊張関係にとどまり続けたことを特記する。

ナチス・ドイツの侵攻と捕虜収容所及びレジスタンス体験によって状況倫理と政治的プラグマティズムの重要性を自覚した時期を扱う第四章では、政治思想として、単に米ソ対立の間で中立を追求するだけでなく、労働組合を軸とした「中間集団」の連合及び「自主管理」という６８年以降の動きを先取りしたものを提示していたことを明らかにする。また同時に『一指導者の幼年時代』などの小説、『ユダヤ人問題に関する考察』などの論説、『恭しき娼婦』などの戯曲、「黒いオルフェ」などの詩論といったジャンルを横断したテクストにおいてサルトルが一貫して人種主義と植民地主義を批判していたことを指摘する。とくに「ネグリチュード」を論じた「黒いオルフェ」を従来にない視点から分析し、シュルレアリスムなどのアヴァンギャルドとサルトルの間の対立という通説を相対化する。アヴァンギャルドとサルトルの関係については、補論１でも論じられる。

第五章では国家社会主義も資本主義も批判する「第三の道」が冷戦の激化で挫折した後に、社会運動のレベルでの現実的に有効な批判勢力との連携を求めて共産党に接近した１

９５２－１９５６の第三期を扱う。この節では有名なカミュやメルロー＝ポンティとの論争が扱われるが、そこで通説とは異なってサルトルの歴史哲学が個人の複数性を「歴史の進歩」という「理念」に積分するいわゆる「歴史主義」では全くないことを示す。

続く第六章ではハンガリー動乱の評価をめぐって再び共産党と対立し、政治的に孤立したままアルジェリアの反植民地闘争に関わり、同時に構造主義が抬頭した１９５６－６８の時期を扱うが、ここでもレヴィ＝ストロースの『野性の思考』のサルトルに対する「西欧中心主義」と「歴史主義」という批判が今日からみるといささか性急であったことを指摘する。むしろフランツ・ファノンとの関わりや『トロイアの女たち』という戯曲に見られるように植民地主義と結びついた「西欧中心主義」を一貫して激しく批判していた点を強調する。またこの時期の、ベトナムにおけるアメリカの行動を批判するために「ラッセル法廷」に参加したことをはじめとする「アンガジュマン」にも注意を払う。

第七章では１９６８年の五月革命の衝撃から生まれた「自主管理」路線とエコロジーなどの「新しい社会運動」を背景にして、ドゥルーズ＝ガタリ、フーコーなどの政治的位置と絡めながら、再び「アナーキズム」を見出したサルトルを扱う。

補論１においては２０世紀思想の同時代性という視点から花田清輝とサルトルの比較を行う。ここでは「内在」論への批判という視点から「物自体」＝「即自存在」という問題圏が両者においてどのように主題化されていたかに注目する。その際、「物自体」と「オブジェ」という概念を比較することでシュルレアリスムをはじめとするアヴァンギャルドとサルトルの関係を再考することをも目指す。

補論２ではジャック・デリダのある一面とサルトルの比較を通じてサルトルから「ポスト・モダン」へという「進歩史観」を相対化する試みを行う。具体的には「物書き」としての両者のスタイルを検討した後に、「時間」論や「他者」論について考察する。また「他者」との関係と絡めて、「贈与」や「言語」というテーマについても分析する。